物捨てに出でゝ干潟の寒さかな

行田

萬葉の歌に後なき寒さかな

餘生の未亡人に接す

我を見て泣く人よ寒し遺兒も見て

師竹に別る

秀衡と芭蕉君にも寒さかな

陸中にて

人首と書いて何と讀む寒さかな

蕉子に對す

君淋しと思ふ頃われも寒さかな

狐吊りて驛亭寒し山十勝

果樹の園に父祖の田を守る寒さかな

牛を吼えて犬狂ひけん寒さかな

能の殘る寒き國なり佐渡が島

子心に不孝重ねまじと寒さかな

鹽田荒れて鷹飛ぶ日ある寒さかな

旗手山の松寒し裸山の中

八つ沼の此道を願意寒き行く

人工孵化場

寒の入

鮭鱒の孵化のさかりや寒の入

佐渡振りを賑ふ臼や寒の入

冷めたき　落し子の龍の冷めたき斑かな

冴ゆる　絶えもせず機婦の梭音冴ゆるなり

大額冴ゆ次第に浪の音なかり

幣政のことを僞銀や冴ゆる灯に

師走　黄金交ぜて師走の路銀とゝのへぬ

脇逸を勤むること二三度

勤め料始めて貰ふ師走かな

船人は碇綱買ふ師走かな

席上某妓に與ふ

句を望む君と師走のいとまあれ

茶の匂ふ枕も出來て師走かな

築き替へし竈二つまで師走かな

極月の風雪熊羆叫び、けり

橋開きありて師走の花火かな

住みつきし師走の米に蟲つきて

貯藏梨の荷止めよと師走らしからぬ

年の暮　ほしきもの年も暮れぬる新世帶

大阪の火の用心や年の暮

棚落ちて立つ庖丁や年の暮

行年行年の絹織雇ふ豪家哉

大三十日　船の荷や積みも殘らず大三十日

除夜軍中の除夜寂として籌かな

春隣　春待や裁ちもくづさず絹白し

春待や膝下の兒童卓上の書

春待や何書を見ても得る所

種揃へしておこすなり春隣

漁師雇ふ判もすみけり春を待つ

春待や宿痾に堪へて憂ふ事

天文

時雨

かへるさや星にしぐるゝ田圃道

川口やしぐるゝ舟の尻と尻

しぐるらん雲になりけり浪白き

置き捨てし床几の端の時雨かな

鎌倉

しぐるゝや雪の下なる奥座敷

山門に時雨の傘を立てかけし

餘生妻女に

哀れなる人に時雨の句を申す

筠軒先生に對す

詩話畫論しぐるゝいとまなかりけり

絲を繰る音の庇の時雨かな

しぐるゝや香に立つ溫泉の洗ひ物

市日毎何ぞのやうに時雨かな

酒田本間氏別墅

木もなくてしぐるゝをかし外郭

濃艶の地に狂風の時雨かな

元伊勢の里石高な時雨かな

施行の湯洲白き松も北時雨

しぐるゝや餘談に當時秘めしこと

足さながら駕籠を落ち行く時雨かな

蜆川のしぐれを語るまでもなく

木枯

木枯や水なき空を吹きつくす

凩や瀑の上なる大悲閣

凩や皆くねりたる磯の松

木枯や谷中の道を塔の下

凩や叭捨てある新墾田

凩や白樺の魔火さそふ森

凩や橡平らお山遙拜所

凩や水に備へん地上げ見る

凩の山裏紅葉溫泉烟に

北風

北風に糞落し行く荷馬かな

北風や積の中の別れ道

北風に魚鹽の便りなかりけり

歸り來ぬ人北風に立つ日かな

北風に車蓋羽折れし形かな

北風に比良のそゝれば鮒のなき

冬空

冬空や舟行の果に日暮るゝ

冬空の下に黄澀の濃き田かな

冬空や津輕根見えて南部領

冬の月

冬の月かつまたの池の蓮もなし

すまじてふ峠越えしぬ冬の月

春に燒けし家居建ちけり冬の月

着庵を汁煮て待つや冬の月

軍容を鳴る瀬大河や冬の月

煤流るゝ水と草原冬の月

根岸

寒月や山にこたへて鶴の聲

寒月に雲飛ぶ赤城榛名かな

送別の月寒く酒を强ひにけり

上の山泊りにせうぞ月寒き

寒月や笞刑の人の放たれて

柝過ぎて後犬行くや冬の月

火にあたりをりて月寒きうしろ見ゆ

寒月や雪東の間の罠獲物

雪

イめば拂へば雪の戀衣

枯木原に雪積んで居る月夜かな

罵るや戎を縛す雪礫

梅干に雪かき入れる嫗かな

神の森雪踏む人もなかりけり

高々と荷を積む馬の吹雪かな

簾朶の雪ほの〳〵白き干潟かな

軒落ちし雪窮巷を塞ぎけり

雪晴れに高き藪ある庵かな

後宮の夜半に雪折れ聞えけり

しれ者の雪の小笠を被りけり

森高う雨雪になりぬ靜かさよ

雪掻いて礫酬ひし門邊かな

干す舟の雪掻き落す日晴れたり

雪丸げ積にあるや三軒家

島の雪海の綠に隔てけり

柳ある方に橋見ゆ廓の雪

枕邊に積む雪奇しく日覺めけり

片富士の片そぎや雪の峰つゞき

遠野勢夜半に著きぬる雪明り

門の雪いつ繫ぎけん馬のをる

雪あらぬ片谷に溫泉の小村かな

一郭の灯や溪の雪發電所

小岩井　雜詠二句

雪除の高さを牛舍二棟建つ

雪チラ〳〵岩手颪にならで止む

艶な句を望む人あり

雪鏡の如し杜陵少年行

更に適切に艶なものをといふ

ひねくるや橋南橋北の雪木履

途中即吟三句

雪晴に海見ゆる我が行く先きに

野ひらけ行く晴雪に風立てり

雪晴れの雞犬我を怪むる

野邊地海岸即景

潮汚れせし雪黄なる埠頭場かな

席上某妓に與ふ

紅染めし雪の兎を想はしむ

自然火

山姥の雪籠りせし灯なるべし

俵麥萠えし見出でぬ雪の宿

以南の水以北の峯や雪の原

牛預けし戻りを雪の塞ぎけり

蹄あとも根雪の地割したりけり

稲架立てしに雪早し猪威し銃

天橋眺望

櫻山の雪成相の雨を欲す

一度降りし雪忘れ榮や冬山家

墜道の飯場石焚く雪籠り

出雲清水にて

雪明りしてこの隈や四季櫻

小岩井雜詠の内

首綱で犢引き來る深雪かな

盛岡中學に俳句講義をなす

窗に吹くふゞきの中の講義かな

雪模様ふゞくにや山のたゞずまひ

望み絶えし吹雪に便りある日かな

吹雪

燈臺を見し戻りなる吹雪哉

休む間に吹雪つのりぬはたと止む

何處來て里に落ちたる吹雪哉

霰

我善坊に車引き入れふる霰

凩に霰降り來る曇りかな

能の日の寒き板屋に霰かな

馬寄せにワッパ乘せ來し霰かな

きぬ〳〵の鼻打ち曲る霰かな

打返し藁干す時の霰かな

金華山志せば冬になる霰

師竹庵

端溪に雲湧き白箋に霰降る

城にかふる壁奪ふ夜の霰かな

箕に添へて笊負ひ戻る霰かな

一團の雲に神在る霰かな

晴れつゞく今日に片時の霰かな

裸木の月に降り來る霰かな

カラ〳〵な藻草に溜る霰かな

帆渡りの島山颯かな

海靜かなるに石切る音や霰降る

途中三湖を見る追ありて降る霰

雲

牛の背に小坊主細き霙かな

日吉社

寶塔に檜の風の霙かな

吹きまはす浦風に霰霙かな

俵裝檢印の日の霙れしが雪となり

霜

大木や月夜に立てる道の霜

小野の道刈田の霜に日和かな

夜半の霜舟に火焚いてお茶の水

とき朝の花火の音や霜日和

霜日和稲掛けし運河堤かな

霜凪に濃き紅葉見ゆ向ひ島

復た川に沿ふやどりなり朝の霜

積藁の枯木の霜に雀かな

土築くは猪除けにもや霜日和

峠越せば入江やあらん霜日和

居残りもなく立つ宿や今朝の霜

勿來より北かや霜の馬の鈴

御巡錫を追ふ三郷や道の霜

舟伏せしに國栖の古る事霜降りて

汐ざゐる名殘とも霜さびの雲

狐つきし人吐きし物か庭の霜

道の霜拾へるを近江聖人へ

霜柱

日暮里に下宿屋を探り霜柱

道と見えて人の庭踏む霜柱

生垣や人佗びて庭に霜柱

中尊寺

苔青き踏むあたりにも霜柱

寒の雨

簀圍ひの魚の潜みや寒の雨

冬日

市中の冬の日早くともしけり

沼の上冬の日落つてあともなき

赤門の下に汐さす冬日かな

冬日落つまこと梢の鴉鳥

嘴鍬を土に鴉の冬日かな

雪を叱す神あらん夕日夕磨ぎに

漉砂を洗ひ磨ぐ冬日影滿つ

枯野

地理

追うて逃げる鴉かしこき枯野かな

住吉の松を南に枯野かな

阪下りて風になりたる枯野かな

墨子泣いて立てり枯野の道の側

とぼ〳〵と藥負ひ行く枯野かな

索然と枯野に落す入齒かな

野は枯れて蘆邊さす鳥低きかな

舟白く漂ひ見えて枯野かな

野は枯れて日にしるき山や噴火烟

臥牛山の麓の高野枯れにけり
家人の雉兎の罠置く枯野かな

讀史

大戰に死所を得ず哀れ野は枯れて
地に下りし鳶に引かるゝ枯野かな
野は枯れて飛松に餘戸鹽田かな
行李柳田に返し掘る枯野かな

鐵露に對す

冬山君に遇ふ牡鹿の山の眠る下
山眠る寺絶えてたゞに尖れり冬の山

海府便り絶えしよにいふ眠る山
百姓を輿に雇ひぬ眠る山
絶えて記行なき蕪村思ふ眠る山
旅全からぬ師を次ぐ弟子や眠る山
田中岩も雉罠桀り冬山家
天橋の圖に加悅大江山眠る
模様彫り罠木に見えて冬山家

冬川

冬川や湯田の蟹石出ずなりぬ
大きなる嘴鳥をるや冬の川
橡胡桃冬川筋の立木かな

すたれたる運河も見えつ冬の川
冬川や那須の高根のそがひ見ゆ
馬墜ちし淵の懸崖や冬の川
冬川と水塚や處一の宮

水涸

子拾ひ谷かくも藤蔓水涸れて
寺は舊觀梅林名殘水涸るゝ
水涸れの樋の裸鷹や食みし鳥

冬田

土埋めて汽車道つくる冬田かな
梭櫚高く梭櫚寺見えて冬田かな

旅人や與謝の冬田の鷺の羣
美豆の牧一木も見えず冬田かな
燈籠も巨刹の道や冬田原
濱沙を波の蹴上げや冬田原
工場も建つや水田の冬の驛
雞も出でず藁捨て干の冬田かな
鴨のつく冬田にいつの松こけて
馬場の内無き茶屋幟冬田かな

氷

流れたる花屋の水の氷りけり
礫打つ氷の上や牛ヶ淵

金閣寺すさまじき池の氷かな

上る人多き港の氷かな

火の映る北上氷りそめにけり

山の池の緑に薄き氷かな

煤水に海鼠雑巾氷りけり

鳶烏咬み合へる落つ田の氷

閃として碎氷船も横はる

軍屯す人籟湖の氷割れして

鯉走りして間なき海の氷る日や

氷柱

石垣に添うて氷柱の長きかな

麥青き上に掛樋の氷柱かな

冬海

底曇りの雲の動きや冬の海

人事

神の旅　浪透る沙の明さや神づまり
多羅葉の大樹けやけき神の留守

神樂　劍の舞神をかたどる神樂かな
二十五座別雷の神樂かな

雜魚寢　月の夜の蔀下ろして雜魚寢かな
東雲に掃き出したる雜魚寢かな

十夜　詣で來て白川衆や十夜講
庫裏の灯も御蠟惜まぬ十夜かな

吹革祭　鍛冶祭や向打殿は何の守
遠方の鍬主見えぬ鍛冶祭
吹革祭秀眞が鑄型何ならん

蕪村忌

蕪村忌　風呂吹をくひ得て寂と座りけり

臘八　臘八の旦峨々たる聲音かな

臘八の門に汝の到りけり
臘八の人無きがごと雪滿地

寒念佛

雲母阪下りて來つるよ寒念佛

鉢叩

わが門を鉢叩かずに通りける
夜道して物とらせけり鉢叩

蒲團

貸蒲團いづれを選ぶべくもなし
坊の文蒲團のことをいひこしぬ
綿厚き蒲團に父孫妻子かな

貧しさのやもめ蒲團を著せ申す
母人の藁打たす藁蒲團かな
朝見れば爐中にすりし蒲團かな

東坡贊

賦の一句夢中になりし蒲團かな
蒲團二つ敷けば大佐渡小佐渡かな
千里距る別れに敷きし蒲團かな
藪の音と月明り蒲團展ぶる時
客蒲團三通り持たん富をこそ
我を追うて來し君よ蒲團並み敷かん

足袋

白足袋にいと薄き紺のゆかりかな

絹足袋やなかうど役の勤め初

門搆へ小城下ながら足袋屋かな

安足袋と言はるれど行田縫目かな

指詰りする足袋一つ持ち古りて

紐足袋も義足の主の褄ずりや

此日巡遊興のなかりし足袋拂ふ

毛布

綱ゆるき毛布包みの荷物かな

寒山居にて

百日目横たはる赤き毛布かな

綿帽子

御門主へ女の用や綿帽子

狩

水塚のかげに休らふ鷹野かな

鶴三羽夕べに落ちて鷹野かな

獵

獵況を里より三度報知かな

麥萌えて獵期の芒刈らずあり

冬搆

狼の來ぬ圍ひして冬搆

羽黒山

冬搆の中に鳥居の裸かな

雪圍牛吼をする犬のをる雪圍ひ
雪圍ひして八師團倉庫かな

雪沓　雪沓も穿きなれぬ地酒酌みかはす

冬籠・ものうくて二食になりぬ冬籠
冬籠燈前の思ひ新たなり
熨斗派手な贈りものかな冬籠
都曇てふ樂器見せけり冬籠

盜まれし牛の訴訟や冬籠
集を見て我句樂しむ冬籠
凹みたる日に仰のかず冬籠
繡工の足も縫ふ夢冬籠
孵化の魚放流後まこと冬籠

綿入　綿入の羽織寶生太夫かな
綿入の襟を重ぬる法師かな
綿入るゝ衣やわぎものそれならん
見佛の問法の時の綿子かな
袖狹きも知らず奥人綿子かな

紙子

箔のやうに白き跡見ゆ紙子かな

下ざまの紙子好みを問はれけり

素紙子や商人ながら狂言師

玄猪

江戸の雪積まで粉に降る玄猪かな

火縄振る童もあるや亥の子つく

火燵

旅戻り行李を開く火燵かな

遊歴の畫工に與ふ火燵かな

火燵張つて日脚餘れる中々に

亡き人の向ひをるよな火燵かな

京人に親しむ日頃火燵かな

火燵の間去ることもなく用足りぬ

火燵にてあるじがまねの書見かな

乘りて來し馬を火燵に見つゝをる

杉山氏別業にて庵號を求めらる

亭の名を夏季に思ふや火燵にて

山梔子に對す

喜ばしき時も淋しや置火燵

風呂欲しう思ひつゝ宿の火燵かな

柚子置いて火燵の上の一日かな

兵塵の中に此家の火燵かな
目盲人火燵に凭れば想ふ歌

子規子

火桶

すや〳〵と寐入り給ひし火鉢かな
あぢきなく灰のふえたる火鉢かな
酒を置いて老の涙の火桶かな
吉野記行老懷更に火桶かな

行田俳會

旅籠屋に席を設けし火桶かな
手をかざせば睡魔の襲ふ火桶かな

温石

いつよりか温石先生といはれけり

懐爐

毎日に暦見る老が懐爐哉
不覺なる病に寢じと懐爐かな
懐爐して俳諧の天にせぐくまる

煖爐

朝より客に接する煖爐かな
煖爐の歌病む師に乞へば興乗ると

爐開

爐開いて灰つめたく火の消えんとす

戯れに秋皎に與ふ

園爐裏　念者ぶりの句をさゝやきて爐邊哉

鼻焦がす爐の火にかけて甲羅酒

即事

爐の灰の降るに硯をいとひけり

大根つりて爐邊事なき山家かな

鞦を爐の火さかるに炙りけり

朝からの酒の爐邊の二人捨て置け

爐話のそれとなく袂文や知る

炭

煙草盆に小さき炭の火消えざる

鋸鈍く炭挽いて居る石の上

枯葛は燃えてもいぶる粉炭かな

塾の戸に炭割る音やもろ炊ぎ

寺大破炭割る音も聞えけり

旅の我を炭積んで待つと云ひおこす

炭市の日を待て絹も賣らまくす

炭積めばなど狂ふ馬となりにけん

榾

ちよろ〳〵火榾火の夢の何もなし

刀さげて峠越え來し榾火かな

大原に丸榾干せし垣根かな

秀衡が館に牽くや牛の榾
榾崩れせし音朝に響きけり
松榾を積むや門邊の日に匂ふ

雲軒は「もつきり」趣味をと迫る

椀中の酒火の如し榾いきれ
股凹に燃えべりのして根榾かな
鷲の羽を宿の箒や榾埃
味噌の外貯へあらぬ榾の宿
若者をどやす榾火のあるじかな
物積んで奥ある家や榾明り
家ぢうを煙らす風の榾火かな

榾埃掃く朝一棋新たなる
染めやうを抓み布など榾埃
股榾の股こがり雪や焔々裏
積榾の藪の雪蹼ある鳥が

湯婆

寂として湯婆に足を揃へけり

蕎麥湯

風爐の湯のたぎり殘りに蕎麥湯哉

俳三昧雜詠

作り終てやれ〳〵といふ蕎麥湯かな
蕎麥湯するうしろの音は鼠かな

納豆

摺鉢に納豆の苞をほどきけり

この家に木佛立たすや納豆汁

納豆打つ寢覺寢覺を又寢かな

納豆の甘きはあれど米わろき

晝もなきよな日短かや納豆汁

登米にて

納豆や獅子窟よりも御便り

莖漬

越後屋の莖菜洗ひや男衆

乾鮭

市人の乾鮭洗ふ盥かな

虫籠再興して岐阜より出づ

再建に乾鮭も鱈も參りけり

桝形に乾鮭晝けり江戸の町

魚河岸

鱈

鱈の市きのふの價なかりけり

泰山におくる

遲鈍なれ棒鱈のやうになれ

興鶏平

魯鈍なれ棒鱈のやうになれ

煮凝

片口にありぞと知らず煮凝りぬ

鮫ずきの今宵又たこれを煮凝らす

煮凍と蕪の抽漬が肴かな

風呂吹

子規子を知れる某の饗應に

風呂吹や火によりて又た思ふこと

風呂吹も梨も古人のゆかりかな

卵酒

有馬去りし口なれの卵酒もせず

玉子酒吐哺の境涯妻いふ夜

寒稽古

劍の家當代ゆゝし寒稽古

薪一本持寄る例や寒稽古

寒稽古子弟の骨を鍛ひけり

寒紅

つけさして老けは〳〵し寒の紅

素若の妹に手料理の禮をいひやる

風邪

風邪ひかぬまじなひの句を返しかな

胼

胼の手を恥らう心つくしかな

水洟　水洟を白紙に拭ふ机邊かな

避寒　大浪の打つ暖かき避寒せり

舟寄せて漁翁の見舞ふ避寒かな

縋り來る避寒の宿の馬かりて

防風林風致を添ふる避寒かな

海明かき避寒の宿の山丸し

針山をかりて夫婦が避寒かな

避寒人粉陣打破に鈍れども

野施行　野施行や一本榎野に立てる

姥等　尻高な草履穿き來る姥等かな

前ばかり姥等の顏に白きもの

麥蒔　麥蒔の麥殘しある俵かな

麥蒔くや美濃の農具の面白き

阪鳥　さかどりの一陣を張る處かな

蘆を鳴る風にさかどり待たれけり

さかどりも國替の時になくなりぬ

さかどりがをると小鴨がいふさうな

網代

網代守しぐれにいたく老ひにけり

櫻磈子に告別

一言の別れ曰く句の網代守れ

網代持てば鴨も時折拾ひ來て

網代ほとり洲の宮に鴉猛き見る

柴漬

柴漬をほどいてふるふ小魚かな

柴漬や水に押されて在處

沼尻の川の流れや柴漬くる

火事

大火事のありし日今日を警むる

煤拂

煤掃の捨てもやらざる枯しのぶ

煤を掃く日に織りつまる機のあり

煤掃の焚火や竹の爆(はぜ)く音

煤じまひの爐の炭糞を忘れたり

煤流す川の走りや門一歩

煤じまひ沼夕榮の藏の戸に

煤じまひ昇きそれし米の瀧こぼれ

墓石得しに書齋の煤日後れたり

開門匆々の放れ馬なり煤旦

餅搗

一臼は黄なる餅つく貧しさや

機仕舞ふ一間廣さや餅筵

梅三分咲く餅搗の日取かな

翁を擁して湖南の衆の餅搗きぬ

餅搗を囃さう妓の一節や

古暦

火の患水の患も古暦

動物

狼

狼や炬燵火きつき山の宿

狼に恐れて馬もやらぬなり

鯨

萩藩の謠ひは觀世鯨汁

戻る日の船足揃ふ鯨舟

浦人や鯨の油幾日汲む

鷹

鷹に遠く逃げて藁屋の雀かな

鷹据ゑて暖を過ぐる人數かな

千鳥啼いて浦の名を問ふ船路かな

素紙子に畫をものしけり千鳥など

橋の上をひら〳〵と千鳥腹見する

文屆く日を指折るに鳴く千鳥

砂山の下が廓や浦千鳥

燈臺に雙棲の君や鳴く千鳥

日頃寄せぬ港が丶りや鳴く千鳥

千鳥鳴けばいつもの夜著を掛けるなり

灯あか〳〵と會すれば千鳥鳴くといふ

女名を呼ぶ岩のあり鳴く千鳥

楯に似し岩めぐり鳴くは千鳥かな

浦千鳥夷通ひは三艘出る

離れ家離れ岩あり飛ぶ千鳥

某妓の三絃の筥に題す

蓋はすれど通ふ千鳥の音のあらん

小羣れに添はず小羣に飛千鳥

二子島の灯二つ見ゆる千鳥かな

朱を研ぐ夜千鳥も鳴いてやゝに倦む

船据りぬと舸夫いひあへり鳴く千鳥

出雲

紙所の千鳥の歌のクドキ振り

三度會うて千鳥ひそ音に鳴くところ

水鳥

外濠に水鳥一つ雪かぶる

水鳥のあちらへ泳ぎ傾く日

水鳥の鳴く時城の夕日かな

水鳥に近き端居や長駝亭

水鳥のばさ〳〵と立つ夜網かな

不忍や水鳥の夢・夜半の三味

水鳥や小村も見えて陣の外

汐時の過ぎし戻りや浮寢鳥

内浦になだらな島や浮寢鳥

城を出て逸峰見ゆれ浮寢鳥

堤なほ遠し馬も行く浮寢鳥

流れあさる舟皆下りつ浮寢鳥

長旅の人と酌む淋し浮寢鳥

汐醉ひの魚拾ふ朝や浮寢鳥

牧牛の羣れ來れば水鳥も輪に

蕃樂を歸順に聞くや浮寢鳥

出雲、關（五本松の名所）

船も絶えて鳩の飛ぶ空浮寢鳥

讃岐は山の襞蹟なき國浮寢鳥

海までの水路に僞砲浮寢鳥

鴛鴦

渡り廊下の雪けしき鴛鴦見えずなりぬ

鴛鴦の踏む芝つけて櫻植ゑつがん

鴨

もう出でよ出でよと思ふ小鴨かな

石垣に鴨吹きよせる嵐かな

築山や鴨這ひ上る芝の上

雪の日の鴨場の御狩せられけり

羣れ來ては溢れてかへる鴨場かな

沼移りしてつどひをる鴨小鴨

松濃きに蘆枯れて鴨游びけり

彼方より立ちそめて鴨の羽音かな

望む松凍てつく星や鴨の鳴く

湖南夜話湖東に次ぐや鴨の聲

諸鳴きの中に羽ばたく番鴨か

灯華落つる風ゆれや鴨の靜まれる

白魚船ならぬ簿や鴨鳴く夜

冬の雁

蜆かく舟も見えずよ冬の雁

伊勢の田の芥に下りて冬の雁

藁塚の伏水に多し冬の雁

東ね藻の冬に雁來る磯田かな

笹鳴笹鳴や泉の見ゆる垣の内

鷦鷯山越しに窟のあるや三十三才

三十三才住持が貧の竈まで

桑老木倒れしもあり三十三才

塔中の畑作りや三十三才

三十三才水車粉ナ屋も瀧の川

梅は隈々池隔つ茶畑鷦鷯

水返る刈田あり塚を三十三才

冬の蠅　御堂仰く綿屋珠數屋や冬の蠅

河豚　河豚の文天雪降ると物しけり

鶚の巣見えて河豚釣る岩閒かな

生海鼠　砂の中に生海鼠の氷る小さゝよ

盛宴に一盃を置きし海鼠かな

海鼠あり庖厨は妻の天下かな

海鼠突き大凡の數を讀みにけり

古への冕の形を海鼠かな

千百里漂ひ來る海鼠かな

海中の木酣しに下がる海鼠かな

牡蠣

牡蠣殼や磯に久しき岩一つ

牡蠣船に大阪一の艶話かな

牡蠣舟を出でゝ天滿の雪景色

牡蠣船にありて文來る誰よりぞ

雪蟲

雪蟲の飛ぶ廟前の木立かな

植物

山茶花

山茶花や日南に氷る手水桶

小日向に山茶花の庵を結びけり

山茶花にあるは霙の降る日かな

山茶花の花の田舍や納豆汁

歸庵

松稾駝山茶花植ゑぬ奥の方

山茶花に旅中の吟を誇りけり

山茶花や學校になき風圍ひ

山茶花や謫居の跡の寺一宇

山茶花や先づ春けける陶土見る

山茶花や授戒會名殘齋に來て

返り花

御溝水返り咲く花枝々に

本山に上る十年や返り花

南方に任を重ねぬ返り花

芭蕉蓑塚

蓑ぬぎし晴れを思ふや返り花

日和見の漁長が家や返り花

舟路とりて落ちしと見ゆれ返り花

谷に去る君が占見ん返り花

避難港にかゝる旗亭や返り花

返り咲くや鬪牛王の動く年

果樹園に野良木あり返り咲くに質す

日和山を游園に返り咲く木あり

珠を抱く灣の様返り咲く宮居

出雲大社にて

寒梅御櫛笥あるに寒梅匂ふらん

茶の花

茶の花や洛陽見ゆる寺の門

提灯に茶の花しるき夜道かな

紅葉散

蓮枯れて寺の紅葉もなかりけり

紅葉散つて庭木の槇の淋しさよ

紅葉ちる此頃庭を掃かずあり

船頭の社案内や散る紅葉

大山は酒所なり

奥の灘は紅葉散りしく門邊かな

枯柳

野平らに國の境や枯柳

枯柳枯梅の下に芝の鴨

唐崎の吹きさらし畑の柳枯る

池も涸れて芝廣き方や枯柳

捨てありて腰する藁や枯柳

埋めたき池も居馴れぬ枯柳

柳枯れて棚伏せし藤の束ねある

蔭に女性ありのびくのこと枯柳

冬木立

土手道や酒賣る家の冬木立

畑中や王子に近き冬木立

椀程な塚の上にも冬木かな

車置いて城市に遠し冬木立

門前に舟干す冬木日和かな

ありといふ小屋にも出でず冬木立

眞上より瀧見る冬木平かな

疊干す冬木の下や驛日和

大木戸に似し門ありて冬木立

香住應擧寺

かくて住みし應擧ぞと知る寺冬木

冬木立岩組も猪の渡り筋

地すべりの時の瀦水や冬木立

坊守の脂創る瘤冬木かな

和田山は今はなし煤黑冬木見る

宮冬木砂持の通ふ道となり

狐狸圖

枯木月一つあるも怪しき枯木かな

行田

入口や地城の跡の古銀杏

蜜柑

無花果は落し盡きぬる青蜜柑

山の上蜜柑畑を逍遙す

冬牡丹

積藁の三つある庭や冬牡丹

地に柑子垂れて牡丹も冬を咲く

讀史

正統を立たせ給へり冬牡丹

牡丹さく白沙の冬や明月寺

冬薔薇

禁足のけふを外出や冬薔薇

思はずもヒョコ生れぬ冬薔薇

冬薔薇月山鍛冶の下りて居り

湯島栞に根赤苣あり冬薔薇

水仙

鉢淺く水仙の根の氷りつく

水仙と唐筆を賣る小家かな

「ほとゝぎす」出づ

時鳥は月水仙は氷かな

金澤

三體の觀音殘る水仙花

白磁さへ渡りと見えて水仙花

水仙や機翁を祀る機所

霽月庵二句

水仙の香や大硯も光風居

君に壽す水仙の句を詩箋かな

水荷ひ呉れし水仙兩三花

水仙につめたき飯のこぼれけり

和露莊郎事

水仙の間を選ぶ奴婢も三四あり

寒椿

漁村町をなす裏山や冬椿

寒椿雜木ひらきて神の庭

落葉

落葉掃いて文庫の訴訟安堵かな

鵜も踏んで鵜匠が庭の落葉かな

湖の中に枯木立ちゐて落葉かな

蘆の中の水に溜れる落葉かな

落葉して湖水の漁に疎きかな

左右にある殉死の塚の落葉かな

羽黒山南谷にて

朴落葉俳諧の一舎殘らまし

立岩の裏も神ある落葉かな

箕で伏せし鼬も畑の落葉かな

大音の僧住む里の落葉かな

狐飼うて臭ひも馴れし落葉かな

萱草もあとなく落葉掃かれけり

釣沼は村見ゆる方や楢落葉

橋畔旗亭岩も掃く日の落葉かな

鞍馬判威も衰へて落葉かな

葭立てば落葉も寄りてあさる蟹
陣の跡地を走る風の落葉かな
落葉掃けば秋見ぬ地蟲甲へり
密涸れにや蜂戰へる落葉かな

銀杏落葉

そゝけたる梢銀杏の落葉かな
松立つて漁村の銀杏落葉かな

殘菊

雞に畑菜食はれぬ殘る菊

枯菊

土凍てゝ鉢植の菊枯れ果つる

枯るゝ菊みぞるゝ松になりにけり
風垣をして菊見えず枯るゝ頃
蠶桑も拙なき里や菊枯るゝ
釋名をいふ庵住や枯るゝ菊
溫泉のほとり菜畑日和や菊枯れて
松二木耄れて菊さへ枯れにけり
捨植ゑの菊枯〳〵になるが惜し
菊枯れて枝瘤見せつ梨棗
菊枯れて庭にも一つ藁塚を
刈田直ぐな夢殿や菊枯るゝ家

大根焚火して大根洗ひの一日かな

蕪

束ねたる牛歩が蕪句にせまし

留錫のお物好みや蕪汁

二三日の京と蕪を忘れ得ぬ

俳陣のうしろに据る蕪かな

ぶり〳〵に似し長かぶら面白や

鞍づけの蕪が落ちそな馬が行く

蕪作る大百姓や聖村

産の祝ひ又の祝やかぶら汁

我がかぶち贈る天下の二人かな

繪の具こぼれも室暖かや蕪汁

讀春風馬堤曲

蕪と柚子と三々白く五々黄也

蕪赤き里隣る砂利を上ぐる村

葱

葱掘れば狐踏むらん畑の霜

葱掘れば筑波颪も香に覺むる

葱畑の藁塚や鵜の柴寄せて

修忌の蕪參らする葱も一束ね

干菜

菜を干して棗痩せたり藪の外

古塀に鼠の上る干柴かな

菊刈れば干柴に蜂の立つ日かな

木香まじなふ飯櫃に抽子と干柴かな

干柴汁に柿の核見る冬至かな

冬枯

冬枯の落葉の下に躑躅かな

賀婚

鬼史娶り浪速江に冬枯を見ず

茶畑の冬枯の草かへしけり

冬枯や墾き捨てたるこのあたり

草枯

草枯に染物を干す朝日かな

立てかけし簗のからびや草枯るゝ

草枯れて古沓はかずなりにけり

刻の木のあらはに草の枯れにけり

草枯の長堤蜜柑山のあり

枯芝

綱敷天神松生えず芝の枯〳〵に

枯芝の奈良を見て宇治に宿る雪

行田小崎沼

枯蘆

枯れ〳〵や蘆の名殘りの二三本

堆き砂の寄りけり蘆枯れて
防戰に燒かれし村や蘆枯るゝ

繼橋

蘆枯れてふりにふりたる入江かな
雲樹寺の蘆の枯れけめ四脚門に
舟沈むも柴漬のたぐひ蘆枯るゝ
遂に築かす城地の規模や蘆枯るゝ
枯蘆の隔つ町橋のとゞろ鳴る

枯芒

芒枯れし池に出づ工場さかる音を
芒枯れし穗につく須磨の松ふぐり

刈る頃の枯芒長風の丘
酒試醸未だなり野は枯芒

湯河原

枯尾花

城あとや五段平に枯尾花

枯茨

赤き實や櫻が下の枯茨
夕馬の腹搔く茨枯れにけり
戒律の山門外や枯茨

雜

歸省句稿抄（明治三十六年）

箱根

街道の杉の並木や山の雪

岩淵

尻高な川舟下る寒さかな

名古屋天籟庵

寒かろと夜食を強うるやどりかな

京都

年の市ほろ〳〵降りに降られけり

漢々庵

母人に親しくなりぬ蕪汁

雨中に句佛法主を訪ふ

參りつきて法主臺下の時雨かな

法主多籠日記あり

玄猪餅のことも漏れずに日記かな

御病床

御疎末に見奉りし蒲團かな

罷り出て祖師堂を拜す

花かこふ一間も見えて寒さかな

高廊下時雨晴れ行く日ざしかな

大阪月兎庵

女房をよせて行年を語りけり

夜行汽車廣島に下る

息凍る窗に朝日の透しけり

宇品

舟に乗る客我れ一人年の暮

高濱上陸

故郷の赤土山や枯尾花

松山著、老母家兄其外甥姪皆健也

母君と二人であたる火燵かな

家新らしく舊觀を止めず

甥の世の家に戻りて年一月

元日

元日の雪降る城の景色かな

萬歳は來ず、於福、チョコナンチョイ〳〵など
いふもの來る、舊習依然

お福にも祝はれにけり十年目

二日墓參

父君に嫁見せ申す寒さかな

三日子規子髮塚に詣づ

土凍てゝ梅檀の實の落ちてあり

子規子舊宅前

櫨賣る家二三軒寒さかな

同日道後入浴

湯女が來て酌する屠蘇の面白や

回禮

回禮や彼家の柳この家の梅

四日内田農園を見る、園主は精勵篤實の人、奇行に富む

松山の賢人見たり水仙花

暖國に林檎植ゑし人や冬籠

梨木園の剪枝も過ぎつ春を待つ

五日池内氏に游ぶ、盧子の長兄也、謠會

むかし〳〵のお師匠様や謠初

此日全家撮影

蓬萊も寫さまほしや母の側

六日俳句大會席上子規居士を祭る(牛伴極堂、霽月と會す)

おぞましさ寒さ拙なさを笑はれな

七日出發

薺粥すゝりながらや暇乞

新

年

新年

元日

元日や寺にはいれば物淋し

元日の袴脱ぎ捨て游びけり

元日の屏風隠れに化粧かな

元日やよべ寝ぬ化粧美くしき

明の春

伊勢人や神の御顔明の春

花の春

聖や賢や竹林に愚や花の春

新年

兵營に年新らたなる起床かな

正月

正月やよき旅をして梅を見る

かき菜汁正月の膳うれしけれ

松の内

清元の師匠若しや松の内

松の内女鯛の料理ことによき

松納

松納め松引きすてゝ游びけり

餅入れて粥を煮る日や松納

初日

初日さす朱雀通りの静かさよ

蓬莱

蓬莱や海老かさ高に齒朶隱れ

門松

門松に柑類植ゑて家毎かな

門松や裏門持つて町住ひ

輪飾

輪飾や竈の上の畫淋し

床飾

東うけ南うけの部屋や床飾

飾臼

飾臼四ッ杵かけて祝ひけり

若水　若水や春立つ神も供御の上

屠蘇　屠蘇鱈汁數の子の御例かな

年禮　根岸庵主なくと禮者游びけり

寢積　大形の草紙本ある寢積かな

若餅　若餅を三臼ばかりを搗きにけり

着衣始　朝からの化粧がましや着衣始

書初　書初やいづれ彈初と親心

筆初　筆初に質す古碑

初荷　湯河原はボクタ車に初荷かな

賣初　賣初や多分に切つて尺の物

弓始　弓始關口召して御覽かな

天清淨地　清淨や弓始

謡初　謡初四拍子已に參りたる

羽子板　羽子板の押絵はがれし古びかな

遣羽子　遣羽子や羽子の眞白き一と束ね

湯河原

遣羽子や湯女が綺麗で中西屋

手毬　四ッ手毬上手にこそはゆりにけれ

萬歳　上京や萬歳はいる寺の門

萬歳の畑に舞へる在所かな

淺蟲

猿曳　猿曳のまねして游ぶ小雪車かな

春駒　春駒や紅さいた眼が美くしう

初卯　大阪を夜に立つ初卯參りかな

七草　振袖にかゝる薺や臺所

左義長（どんど）

一家中どんどの灰を分ちけり

舟も寄せて浦靜かなるどんどかな

左義長や國栖の社の御鳥居

城山に上るどんどの人數かな

藪入

藪入のさびしく戻る小道かな

初雞

參候す大手に雞のはじめかな

嫁が君

ほの暗き忍び姿や嫁が君

嫁が君桝も設けぬ世なりけり

福壽草

福壽草君眺むれば病床に

碧梧桐の思ひ出

月斗

□

子規居士の脇立としての崇敬を拂はれてゐた碧梧桐が初めて大阪へ來たのは、四十年以前の昔になる。その時の碧梧桐は、縞の羽織を著流した一介の白面の書生であつた。我等は又絹前垂をして、白足袋をはかされてゐた「大阪の坊んち」どもであつた。一夜、鬼史北渚、井蛙らと心齋橋筋を北濱邊から南へ歩いた。

やゝ廣き順慶町や夜寒の燈　碧梧桐

暗い問屋町を南すると、順慶町がやゝ廣く、それから町は賑はしくなる。賑はしい心齋橋を通つて宗右衛門町を左へ曲つた。

町の名は宗右衛門夜は長右衛門　碧梧桐

順慶町も人名が冠されてゐるが、宗右衛門町とか橋向ふの九郎右衛門町などは人名が地

名になつてゐる事がすぐ解る。宗右衛門から、夜は長右衛門と洒落れたのである。その他立ち處に句を爲す碧梧桐にすつかり驚いたのである。

□

「車百合」發行に際して露石が子規居士に賴んでくれて、祝句を得た。

俳諧の西の奉行や月の秋　子規

碧梧桐のは、

御祝ひに澁柿やろか芋やろか　碧梧桐

子規居士のは當時から有名になつた句である。碧梧桐のは、磊落な句の一體として、我等は眺めた。

□

子規庵の蕪村忌（明治卅二年）に寫眞を撮る時。人が澤山で庭に筵を布いて二重三重に竝んだ。子規居士の座席だけをあけて置いて鳴雪翁を中心に坐つたり、中腰になつたり立つたりする。不折、爲山氏等が立て見て位置を直したりする。いよ〳〵よしとなつて、子

規居士を碧梧桐が背負うて來る。なか〳〵六ヶしい仕事だ。身體のいづくに觸れても痛むのである。子規居士は、顏をしかめて痛さを堪へられるのである。やうやく中央の座に下して、脇息に凭て横にぢりに坐らせた。この間、一同は聲を含んで、眉をよせて心配の氣配にうち眺めるのであつた。この子規居士を、おんぶして椎の木の下に竝んだ三十幾人の中央正面に坐らせるのは碧梧桐でなければ出來ぬ大役であつたのだ。

□

ある夏は、碧梧桐に、京に居た露月、大阪に來てゐた墨水の三君を迎へて、大川に舟を泛べて游んだ事がある。今の中之島公園の所は無論川の中で、納涼舟で滿ちてゐた。我らの舟もその中に交つて酒を飲んだが、これでは面白くないとして、天神橋の上流へのぼせ天滿橋の下流で舟を泊めて、絶え間なく、うちあがる花火を川下に眺めて、提燈や行燈の燈で即時即景での句を手帖にものした事もある。夜更けて川を下つて、今は埋まつてなくなつた、蜆川へ漕ぎ入つて河内屋へ上つた事であつた。碧梧桐は日本新聞に「西征日記」としてその記事を書いて、子規居士から褒められたと聞いた。

□

碧梧桐と愚妹との婚儀の式は、北の靜觀樓で擧げた。墨水が萬事碧方の代表となつて世話をし、青々が月下氷人の役をつとめた。その前後は碧梧桐の往來がしげくなつてゐたと記憶する。

□

碧梧桐の根岸の家へ游びに行つた鬼史と北渚と予に對して、

三才子竝べる緣や木瓜の花　碧梧桐

たしか、そんな句を云つた。すると鬼史がぼけの花は三才子に關かつてゐるのですか、など今日の漫才式の笑語を吐いて、皆を笑はせた。

□

ある時は碧梧桐が、辭三醉や碧童や後の鵜平や觀魚なぞをつれて、大阪を襲ふた事もあつた。道修町の我家で一同が泊つたりした。

□

ある時の碧梧桐庵では、鬼史と予の歡迎會を開いてくれた事もあつた。大學生の乙字、井泉水、金雞城、不句などの新人に初めて會ふたのであつた。

水鳥は皮剝の子を見知顏　月斗

鬼史の句は、たしか、

水鳥や水深ければ艪も靜　鬼史

碧梧桐は頻に推賞して皆に示した。

□

子規居士歿後の「日本」俳句は碧梧桐選になり、少々勝手が違ひ出し、全國行脚では但馬の域崎で會ひ、九州長崎で會ひ、いよ〳〵勝手が違ふやうになつた。大阪へ來た頃は益々傾向が違つて來た。

然しその頃の新傾向はすばらしい勢力で、平氏でなくては人でない。といふ有樣だつた。碧梧桐の過ぐる處草木も靡くのであつた。

□

碧梧桐の大阪移住。鳥居素川氏の「大正日日新聞」の社會部長時代の彼は全く句に遠さかつてゐた。それから洋行時代は、ある意味で得意時代であつたかも知れぬ。

□

家庭の碧梧桐はまめな人だつた。海苔一つ買ひに、わざ〳〵洋服を著て、三越迄出かけて行くのだ。予等には夢にも思へぬことだ。又細君の爲に、著物や半襟なども買つて來る。これも、予等には出來ぬことだ。女といふものは、自分の好みを主張するもので、色とか、縞とか、柄とかいふものをやかましくいふ。妹は、碧梧桐の選んだものを最上のものとして、喜び迎へたのも不思儀に思はれた。

碧梧桐の旅好きは昔からで年中飛び廻つて居た。白雲青山、花鳥風月を、ひとむきに悦ぶのでもないらしい。人事の問題葛藤に專念するのでもないらしい。本來のまめさが、汽車に乘り、船に乘りすることを、面倒がらぬ活動性が、家にぢつと居ることより旅行する方を好む點があつたとも思へる。山登りも自慢の一つで、登山流行の先驅者ある。運動も若い中はやつた。晩年は野球ファンで、必ず出掛けて行く。壯健な身體の持主であつたか

らでもある。然も亦一方碁も好きで、なか〳〵强かつたらしい。予は圍碁はわからぬから批評は出來ない。トランプも上手ださうだ。これも予には、わからぬ。酒は全國行脚時代から、頗に强くなつてなか〳〵飲んだらしい。碧梧桐とは紅燈綠酒の間には携はらなかつたから這般の消息は知らない。晩年彼も我が家へ來れば、予も碧庵へ行くやうになつて、膳の上で酒を飲み合ふたが、なか〳〵いけるのであつた。晩酌が醒めて、寢酒を飲むが、冷酒をコツプで飲む、初めは醉うてゐたが次第に醉はぬやうになつて、多く用ゐる事になる。予らには冷はよくないよ。と云ひながら自分は冷を飲んだ。年がいつてからは食味は淡白な酢味のものを好んでゐたやうだ。

□

予の娘達が、次ぎ〳〵に東京に出て河東で厄介になつた。妹よりも、碧梧桐の方が娘らを愛してくれてゐたやうだつた。妹は無精者で、感情屋で、碧梧桐のやうな人であつたから、うまく操縱したものと思はれる。碧梧桐は酒を飲まぬと揮毫をせぬので、夜深になつて揮毫する。娘らは墨磨りが、えらかつたらしい。

□

最後に一言。忌彈なき處をいふ。

愚庵の書に親んだ子規居士の書は美くしい。子規居士の書に親んだ碧梧桐も美くしかつた。

後年の怪奇な書は迷惑なものだ。と云つてよからう。

句も亦然り。

集の成るまで

碧梧桐先生の當年の玉詠の誰れよりも優れて居た醍醐味と一日も沈滯をゆるされなかつた行き方とは曾て晩年の子規居士のそれを評されたる言にも「碧梧桐の句の常にいくらかづゝの變化を認め碧梧桐の碧梧桐たる所と感心される」とある位で殁前居士は尤も先生に注意されたことは明治俳史を識るものゝ知了さるゝ所であり、本集に頂いた序跋にある諸先生の讃評に據つても又明かなる所である。

碧梧桐先生の定型句集を編みたいといふ私の素志は先生が晩年の數歳、殆ど毎月一回、關西御旅行の途次に迎送した當地客舍の晝、水樓の夕などに度々述べ、そして蒐め置くことを許され、時には新聞「日本」の子規居士の俳句登載以來のを所藏してをらるゝといふ島道素石氏の令兄の許に借出に伺ふことを慫慂せらるゝお配慮をも受けた。又御著「日本俳句鈔」の秀でゝ居らので古本の賣行がいゝからと私がいふと、覆版せうではないかと御話があつたことさへあり次第に定型句への御關心が蘇られたやうな萌しがあつた、それである時廣島がへりに、舊知某女におくつた句だとて

三度會うて千鳥ひそ音に鳴くとこそ

の句を短册に示されたこともあつた。恐らく大正十五年二月の鳴雪翁追悼句の

梅ばかり十枝あまりをまゐらせん

以後唯一の定型作ではあるまいかとなつかしく思はれた機縁もあつた。

其頃東京の某書肆へこの句集發行を交渉したことがあつたが不幸成立しなかつた。その企が先生歿後の今、輝文館主並びに沽泉子君の深き理解の下に實現の運びになつたので、それでそのことの緒についたのは昨年の御三周忌後、私が上京、親しく河東家をお訪ねいたし茂枝夫人、駿氏に拜肩して後、導かれて展墓をなしその梅林寺や平安堂に六花、葵雨城兩氏を訪ねた後であつた。それで徐々に事を運ばせて行つたが、どうも自分が蒐めある分だけでは完全でないと思つたから、日頃親交を辱うして居る、岐阜の鵜平氏に就いて數多い先生の御自署の俳三昧稿（裏表紙裏句筆はそれ）や未發句の多い揮毫物、さては本集挿入の句短册（四季）ことに珍とすべき先生の寫生畫（插入畫）等の謄寫撮影を受け、西宮の微笑子氏に就てもこれ亦氏が蘆屋時代の先生からお讓受けられたといふ「三千里」「續三千里」及東京俳句會等に常に携行されたる寶に手澤おなつかしい手帳の數々、海紅堂、梅林寺其他の俳三昧の手記等を主として遠くは明治二十九年の北陸行、同三十二年京阪、伊勢旅行の雜記まで貸與された（短冊一葉自書付子の句も壁影表表紙の見返し墨朱和交る句及拙稿も微笑子蔵）これら兩氏の御厚意で全く骨子は成つた。そして「ホト、ギス」其他の明治俳誌の缺卷や或句集などゝ參酌照合するには幸に神戸の圖書館に和露文庫があつた。それらの便宜と先生が時代自編の御集とを併せて約蒐句七千に及んだが時恰も盛夏中に出張謄寫で入念には行つたがそれらの高什を移すに謬りないとも限らないとそれを今に懸念して居る所である。

所で如上蒐めはしたがそれらの高吟の抄錄といふ大難事は前に横はつて居た。申す迄もなく我々が先生の御句を半數抄出するといふことは極めて僭越である。無作法である。他から見れば如何にも盲蛇的であらう。殊に漏れ伺つた所に據ると高足、六花氏は先生の全集に資する爲既に多數の句を蒐められそれが「新俳句」以後年次別として丹念に一句も取捨なさらぬと申すでないかと自問自答するといよ／＼筆が運ばない。けれども既に春來書肆と頁數と句數を約し準備完了の今日徒らに躊躇しても居られない場合である。よし此上は故先生の御教の下に誠意を一貫して進め行かうと決したのである。それには曾て、先生の仰せらるゝ一條

「穩健は俳句の大道なり。奇警、飄逸、滑稽の如きそれ閑道ならんか、而かも其道途として彼此輕重なることなし。唯遂に其道に合すべき歩趨を悟らざるべからず」（「破魔弓」一ノ六）

といふ教が先づ私の胸に蘇り撲つて來た。蓋、至言、心裏深く刻まれて居る言であつたからである。

先生が當年如何に穩健な句を尚ばれたといふ一例として曾て「顯祭書屋帖抄」を評せられた中にも其子規先生の征旅金州所在にての作品

鵠の人に糞する春日かな
永き日や驢馬を追ひ行く鞭の影
行春の酒をたまはる陣屋かな
戰ひのあとに少き燕かな

金州の城門高き柳かな

梨老いて花まばらなり菫畠

梨咲くやいくさのあとの崩れ家

などを擧げられ「穩雅優容少しも差迫つた所がない一方からいふと戰後の光景であるといふので徒らに悲慘な詞を使つたり豪傑ぶつたりなどを言ひ散らしたりする誇張的分子は少しも認められない。そこに子規居士の苦心があつて、それで溫雅ななかにちやアンと戰後のある光景が現はれて居つて如何にも其實境に臨む感のあるのは老手と言はざるを得ない」と讃せられて居たのがいつも胸奥に存して居るので、抄出の大道大本を前の箴言、これの評語に措いて事を進めて行つた。

亦本集には前に述べた句集の一骨子たる處に行はれた「俳三昧」の句が發表と未發表となく多く見へる。これも申す迄もなく、先生が六花、碧童、乙字などの親近な三四氏との會合にはじまり後には相當多い人が相參して居るが其最初の其句作覺悟を左のやうに述べて居られた。

○極力俳三昧を修する以上はせめて十日なり二十日なり他の用を抛つて句作の境に入浸りしてをりたいやうに思ふこと屢々であつた。

○俳三昧を修するといつても別に變つたことをするではない。句作に熱心な二三人が題を課し乍ら十句程度に句作するのである。早く十句に滿ちたものがあればそれを限りに其題をやめて一應出來榮を略評して次の題に移る、かくして時間の許す限り題を進める。朝から晝迄に三題、

晝から夕方迄に三題、夕飯後夜半迄に四題、都合十題百句の句作を今日迄の多作の限度として居る。一題の句作時間三十分乃至一時間、句作に熱中する時は殆ど雜談の遑もないのであつた。

○ある感興の乘つた句作は車に油を濺いだやうなもので、比較的に容易であることはいふ迄もない。其出來榮の可否は別問題として我乍ら咳唾玉をなすかと思ふやうに句々口を衝いて出ることがある。さういふ時の愉快さは天下何物にも譬へやうがない。予は今秋（明治三十八年）始めて句作の快味を覺つたやうな思ひがした。

○所謂句作に油の乘つた時は感興の油然として湧いた時で、其湧くや雲の如く、噴水の如く卒然として天を覆ひ、俄然地を泉にする。其力何物も抵抗し難い云々。

以上は其一二の言であるが、以て類ひ稀れな猛精進、猛氣力ぶりが分かるであらう。其當時の先生の手帖の題下に「某子途中より逃げかへる」といふ一項があるのを見ても其場の眞劍味がまざまざと見ゆるやうである。かゝる企の下、所謂先生の道に徹した快味の御境地より生るゝ吐嘱にしてはじめて百世に殘る先生が御作であり、亦かゝる鏤骨細心の句を本集に據つて味解し得ることは今日相共に先生の靈に謝すべき事と信ずる。

更に抄錄しつゝあつて一言の要あるは、其後一般に新傾向句といへば佶屈難澁な調とのみ思はるゝ方面が多いやうであるが、先生が明治四十二年春夏の第二次行脚中でも決してさうではなかつた。其越後推谷での「日本俳句鈔」の選句態度についての質問にも「日本俳句鈔を錄するにあたり其不

磨を認められし句の會々平易句中に多かりし結果に外ならず」と擱ふべき作句行程を辿され、亦「許六曰く、一句成る毎に之を畫中に藏め更に蓋上に立ちて四方を睥睨すべしと、之れ許六の俳句新傾向論なり、許六は二百年前既に業に新傾向を道破せり」と其覺悟、根抵を示されたものであつた。さういふ風な示唆や御言動の下に基づき本集は大半の編成を了した。

而かして次には明治碧梧桐作風の一エポックを成したる所謂城崎時代につゞいて出雲時代に及んでは傾向も順次様移り變化次第に多くその氣分の旺盛裏に九州行脚は押進まれたが、不思議に故山をめぐる四國に入られてそれが一周中はこれは又多く復古調が見られた。其尤なるものに高知、丸亀二箇所の俳三昧の作がそれであつた。かくて又本土玉島に入り再び直下の急湍滔々、無中心論を作に示された。其間一年餘それらの御句抄出するには單に時代と土地の主流に沿うて終始したことも亦特に記して置きたい。申さば常に先生を拜し、ともに隨游して行きて止まる底に自然稿了と成つたのである。それだけ半面にはまた讀者に先生を多く識つて頂けるかとも考へても見られる。そして本集は本來某先輩の閲を懇請する順序であり、しかしすることが私の僭越な罪を少なくする所以を知つてゐたのを事に妨げられて果し得なかつたのは遺憾である。定めて魯魚其他の謬りなど隨つて多いであらう。幸に重版の日あれば訂したく切に大方の御教示を待つものである。

終りに臨み本集編成に贊助された諸先生及右の資料など御貸與に吝かならざりし前記二氏其他種々の便宜を與へられた數氏の厚意を深く感謝する所である。

昭和十五年閏二月念九

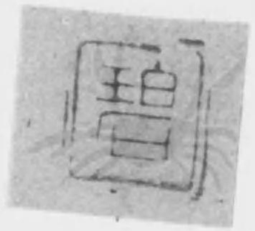
其前日集の稿本を携へて松山西郊西山なる寶塔寺に故先生の瑩域に
參し以て親しく御靈位に謁しまつり歸りて　匆々

亀田小鮎識

誤	正
六九頁	
綠△は	綠°は
藤△は	春°は
簞△は	簟°は
火△は	灯°は
朗△は	卽°は
密△は	蜜°は
園△碁は	圍°碁は
彈△は	憚°は

誤	正
一六三頁	
一六四頁	
一九三頁	
二四〇頁	
底△芝は	庭°芝
茱△は	茱°芝
三七〇頁	三九二頁
四〇七頁	四二二頁
四二四頁	四三四頁
鴉鳥△は	鴉島°跋文一頁
衞△は	衞°
秀衡△は	秀衡°〃五頁
域△崎は	城°崎
不思儀△は	不思議°〃六頁
先驅者は	先驅者の〃六頁
で°	
先驅者は	先驅者〃七頁
園△碁は	圍°碁〃八頁
忌彈△は	忌憚°

碧梧桐句集



昭和十五年四月十五日印刷
昭和十五年四月二十日發行
昭和十五年五月一日再版發行

定價 金參圓五拾錢
外地定價 金參圓八拾錢

著者 河東碧梧桐
編者 亀田小蚪
發行者 大阪市東區横堀二丁目一六 植田進午
印刷所 大阪市東區横堀二丁目一六 輝文館印刷所
發行所 大阪市東區横堀二丁目一六 輝文館
電話北濱二五二五・三六九四
振替大阪二一六四

終